



広報名称の「つなぐ」には、スタッフの「希望やチャレンジ、思いをつなぐ」という意味が込められています。



事業遂行、目標達成に必要な条件

院長 森下 嗣威

病院という組織は、多くの部署がそれぞれの役割を担って動いています。それらの部署が有機的につながり、すなわち十分なコミュニケーションを持って機能しないと、我々が考える良質な医療しいては患者さんに満足していただける医療は提供できません。

組織が機能するということは、どういうことか。組織やそれぞれの部署の問題点が的確に抽出され、それに対する解決策としての事業、プロジェクトがしっかりと履行されて行くと言い換えることもできるでしょう。

そこでスタッフに求められることは何か？

「決断」「実行」「スピード」の3つです。

「決断」は、主に幹部職員が行います。そこで話が進まなければその組織はもうすでに存在していないか、早晩消滅するでしょう。

「実行」は、当院も公的機関ですから決められたことは行われるはずですが、しかし行くと決めてもなかなか実行に移されないのでは事業のタイミングを逸するでしょう。ましてや何もせずに放置して、そのまま無かったことにする「たなざらし」という言葉は現代では死語であると信じています。

1番重要なものは「スピード」です。やると決めたことをいつまでも実行しない。実行し始めても完遂まで時間がかかりすぎるなど、一般的に公的機関ではこのような組織機動性に問題がある事があります。

令和7年の米騒動の時、政府備蓄米の放出がありました。その際に、政府の会議で米放出の最終決定する前に購入することを企業決定をし、周知の通知があったら即購入申し込みをした企業がありました。状況を見定めて、決断し、即実行した典型です。結果としてどこまで企業業績につながったかわかりませんが、動かなければ結果も出てきません。

生き残っていける企業(病院も)とは、必要なことを先見性を持って「決断」し、タイミングを逃さず「スピード」感を持って「実行」する機動性のある組織であると考えます。

【大雨に備える地下の防災対策について】

事業管理者 國岡厚志

近年の異常気象によるゲリラ豪雨や大型台風の発生に備え、当院では患者さんと職員の命、そして病院の機能を守るためのさまざまな防災対策を行っています。

今回は、特に「水害対策」に焦点を当て、普段はなかなか見ることのできない防災対策についてご紹介します。

1. 地下にある「病院の心臓部」

◎非常用発電施設

落雷や送電線トラブルによる停電時、数秒で自動切替。

手術室・人工透析室などの非常用電気系統やコンセントなど命に関わる医療機器へ電力を継続供給

◎冷暖房などのエネルギー系設備

院内の空調や給湯をコントロールし、快適な療養環境と衛生管理を維持

◎給食センター（厨房）

患者さんへ毎日安全で美味しい食事を届けるための調理拠点



↑非常用発電装置 2基

2. 大雨から守る「3つの排水・防水対策」

施設は防災ハザードマップの「土砂災害警戒区域」「洪水浸水想定区域」のエリア外ですが、水が入りやすい地下を万全に保護しています。

◎強力な排水ポンプの配備

万が一の浸水時、エリアごとにある地下ピットの大容量のポンプが自動稼働して迅速に排水

◎土のう袋の設置

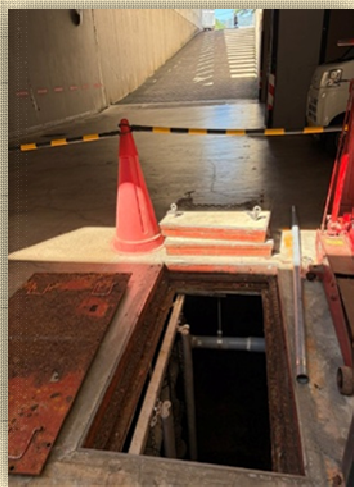
浸水を防ぐ土のう袋や防水シートを保有（近くの町水防倉庫に土のう配備）

◎定期的な点検

設備がいつでも確実に機能するよう、日頃から定期点検を実施



↑地下ピット 排水ポンプの一例



3. 災害時にお互いができること

・気象情報や館内放送に注意を払う

・排水の逆流や雨漏りなどの「浸水兆候」を発見した場合は、速やかに事務部へ連絡

※病院機能が止まらないよう、日頃からの備えと職員一丸となったご協力をお願いします。



院長の思い

100年の旅館



一つの旅館が100年以上続くにはそれなりの理由があります。単に後継者がいるだけでは経営は成り立ちません。

皆さんが旅行に行ったらと仮定して想像してみてください。旅館の敷地に入ったら、庭木はきれいに剪定されており、雑草はなく、きれいな花が咲いている。玄関に入るとスリッパは整然と並べられ、床は見事に磨き上げられている。何より迎えてくれた旅館の職員の笑顔が素晴らしい。決して新しい、大きなホテルの様な旅館ではないけど、玄関を入っただけできっと美味しい食事が食べられて、ゆったりと素晴らしい時間が過ごせるだろうと確信が持てるでしょう。

かたや創業20年の旅館です。玄関前の庭は雑草がそのまま放置され、玄関を入れば天井は雨漏りで穴が開いている。通路や廊下のあちこちには物が積み上げられ、室内の壁、トイレ、浴室などに「・・・禁止」の張り紙が貼っている。職員は顔を引きつらせて、対応も要領を得ない。この様な旅館に安心して泊まれるでしょうか。

我々は、たとえ小さくても、100年の旅館を目指したいと思います。

院長 森下 嗣威